

## 筑波山を日本遺産に

山梨県立博物館長・筑波大学名誉教授  
守屋 正彦

### ◆経歴◆

1978年4月 山梨県立美術館学芸員  
1992年4月 山梨県立美術館学芸課長  
1995年4月 筑波大学助教授  
1995年4月 筑波大学人間総合科学研究科教授  
2018年3月 定年退職  
2018年4月 山梨県立博物館長、筑波大学名誉教授

### 1. 聖地巡礼

今から10年ほど前になりますが、中国の世界遺産「泰山」に登ったことがあります。泰山は広大な華北平原、中国文化発祥の中心に位置する孤峰です。標高は1,545mとそれほど高い山ではありませんが、山頂は中国皇帝が天命を得て、天地の神に天下泰平を報じて祈念する儀式を行う場でした。

このような儀式が行われていた背景には、泰山が「道教」の聖地であること、また、「仏教」や孔子を始祖とする「儒教」もこの山を聖地としていたことが挙げられます。

また、同じ頃、イタリアの世界遺産である「サクロ・モンテ」を訪ねました。イタリア語で「Sacro Monte」、英語で「sacred mountain」と言い、「聖なる山」という意味があります。

ちょうど中世の頃はエルサレムがイスラムの勢力下に置かれ、イタリアからは聖地への旅ができませんでした。その代償として、聖書の場面を体験しながら聖なる山をエルサレムに見立てた巡礼の旅が作られたのでした。例えるなら、西国三十三ヶ所に倣う観音巡礼のようなあり方でしょうか。

この2つの事例の共通点は、その地域の人々が自然景観を背景に歴史を重ねて「聖地」を作り出したという点です。ここで、視点を日本・茨城に戻してみましょう。「筑波山」は誰もが知る、関東平野に君臨する孤峰です。泰山同様、平野の向こうに他の山並みを押しやって存在しています。

筑波山の標高は877m、日本百名山の中では最も低い山です。しかしながら、古代から人々の営みの歴史が重なり、おそらく地域の人々、また日本の人々から、長年「聖地」として尊崇されてきたのではないのでしょうか。

現在、日本各地に文化庁から認定された「日本遺産」があります。その遺産を活かそうと、自治体では、歴史・文化資源の保護や観光振興に益するような取り組みが行われていますが、筆者は、筑波山こそ、日本遺産にふさわしいのではないかと考えています。

### 2. 歌の筑波

筑波は、古代から都の人に知られています。とくに有名なのは、倭建命(日本武尊)が東征の帰途に甲斐国にある酒折宮へ立ち寄った際、「新治筑波を過ぎて幾夜か寝つる」(新治、筑波の地を過ぎて、何晩寝ただろうか)と質問した歌ではないでしょうか。この問いに、火をともし翁が「かがなべて夜には九夜日には十日を」(日数を重ねて、夜は9夜、昼は10日です)と詠いました。

これが「連歌」(和歌の上の句と下の句を互いに読み合せていく形式の歌)のはじまりとされています。都の貴族たちは、この故事にちなみ、連歌を「筑波の道」と言いました。現在に続く俳句も、連歌から誕生したと言ってよいでしょう。

南北朝時代になると、後醍醐天皇に仕え太政大臣になった二条良基が、連歌師、救済の協力を得て、古代から南北朝時代までに詠われた連歌の集大成として、『菟玖波集』を編纂しました。その後も、『新撰菟玖波集』、『新撰犬筑波集』、『新撰猿菟玖波集』などが編纂されました。

筑波山は別名を「双峰」と言い、男体山と女体山の山頂に男大神と女大神が祀られています。神仏習合によって、平安時代には「筑波両大権現」と呼ばれ、「神と仏が相寄る山」として信仰されました。

その後、近世まで、厳しい山々で修行して悟りを開くという日本古来の宗教、修験道が隆盛を誇るなど、筑波山は聖なる山であり続けました。

現在、筑波山の中腹に筑波山神社がありますが、この地には、江戸時代まで中禅寺という大きな寺がありました。明治維新時の廃仏毀釈によって、寺は破却されました。

中禅寺の御神体は山そのものであり、平安時代、927(延長5)年に成立した法制書『延喜式』<sup>えんぎしき</sup>の巻九・巻十で、全国の神社を紹介した「延喜式神名帳」には、名神大社と記載されました。常陸国では鹿島神宮と並ぶ、古い社格と言ってよいでしょう。

1626(寛永3)年には、筑波山頂にある両神社と御神体を守る別当寺として、中禅寺は三代将軍家光から保護されました。1755(宝暦5)年に描かれた「常陸国筑波山下画図」(下図)を見ると、楼門の手前に神橋、左に不動堂、右に鐘楼、楼門をくぐり、正面に大御堂(本堂)、左に三重塔、開山堂、葉祠堂、聖徳太子堂、右に境内摂社など、壮大な伽藍<sup>がらん</sup>が整備されていることが分かります。



■「常陸国筑波山下画図」 出所：国立公文書館

明治時代に寺が壊され、その跡地に筑波山神社が創建されました。中禅寺に所蔵されていた狩野探幽<sup>たんのう</sup>作「三十六歌仙図」の板絵扁額34面は、現在、筑波山神社の神宝として伝えられています。

これらは家光が中禅寺に奉納したものです。作者の狩野探幽は、将軍の奥御用(御用絵師)を務め、当時の画家の中では最高の腕を持っていました。『菟玖波集』や探幽筆「三十六歌仙絵」の存在は、歌の象徴としての筑波山を讃える歴史・文化資源と位置付けることができます。

### 3. 蚕の神様

はるか昔から、筑波の里、神郡には、日本の蚕<sup>かんこおり</sup>の神様の総元締めである蠶影神社(通称：蚕影山神社)があります。今尋ねますと、薄暗く活気のない風情ですが、全国で養蚕業を営む農民にとっては、大変重要な神様でした。日本が開国した明治時代には、欧米に絹を輸出して外貨を稼ぎ、近代国家の建設に大きく寄与しました。

また、筑波の地を貫く、鬼怒川(絹川)と小貝川(蚕飼川)という名称からも、蚕の総本社として坂東(関東平野)を俯瞰し、日本の養蚕を見守ってきた歴史を感じ入ることができます。

私が勤める山梨県立博物館では、「天の虫のおきみやげ」(2015年12月16日~2016年2月29日)と題した「天の虫=蚕」の展覧会を開催しました。山梨県には各地に「蚕影山」の石碑があることから、養蚕業を営む農民が筑波の総本社へと旅をし、護符をいただいて、事業の振興を願ってきた歴史に思い至ることができます。

### 4. 筑波山という聖地

古来より多くの歌に詠まれ、現在は県内高校の校歌に「関東の鎮め」としてその姿が残されてきた筑波山。富士山に次ぐ被写体として、江戸時代の浮世絵に描かれてきた筑波山。壮大な景観の中に、歴史や文化が語られ、尊崇されてきた筑波山。

そして、現在、新しい大御堂が建てられ、坂東三十三観音巡礼の地として、「神仏が相寄る聖なる山」という誇りある姿が再現されている筑波山。

歴史・文化・教育という視点から見ると、筑波山は、この地域で培われ、育まれた我が国が誇るべき日本遺産に相応しいと思います。そして、欲を言えば世界遺産。筆者はそう思うのです。



■ 神郡の町並みと筑波山 出所：筑波総研(株)